

卷 頭 言 — 情報化と松と檜 —

古くから木簡に関わってきた研究者なら、誰しもここ二、三十年の変化に感慨なきをえないであろう。木簡専門の研究人口が十指に収まりかねない初期の様子は、会員三三〇人をこえる現在の学会の盛況ぶりからは到底想像できない。この間の大きな変化が、木簡の出土量の増大によるものであることは疑いないであろう。特殊な史料と見られてきた木簡が、古代史研究の中で認知されるようになったのも、もともと独自の価値があるとはいえ、出土量や出土遺跡が目覚ましく増えたことにより、その意義が再認識された結果と思われる。

この状況に対応して、木簡のデータベースが整備されたのは時宜を得たことであつた。これは長屋王家・二条大路木簡が出現した副産物とも言うべく、また奈文研の方々の御苦労もあつたわけだが、いまや木簡研究に欠かせない道具として定着した。木簡の研究も、多数の木簡から抽出した用例を駆使するものに、重点が移ってゆくことであろう。

しかも木簡データベースはほんの一例であつて、木簡研究が情報化によって受ける恩恵は計り知れない。各種データベースの整備も期待されるが、現在の普通の検索エンジンですら思わぬ役に立つ。先般、飛鳥京の苑池遺構から、「西州統命湯」という薬湯の処方を書いた木簡が出土したが、その出典を調べるのに、まずグーグルで検索してみると、文献名まで出てきたのは驚かされた。考えてみれば、東洋医学は今日でも往事の文献を基にして生きており、データが入っていておかしくない。こちらの認識不足を恥じたことであつた。出典といえ、これまで記憶頼みだった漢籍の検索も、四部叢刊や四庫全書の全文検索が可能になって、革命的な変化が起きている。

ただ自戒をこめて注意したいのは、データは全て人が入れたものという当たり前の事実である。かつて『続日本紀』の一字

索引が企画されたとき、その試用版をいただいた私は、宣命にあると記憶していた「大夫人」の用例を捜そうと、引いてみたことがあった。しかしいくら調べても出てこない。結局、その語を含む一行が脱落していることに気づいた。念のため編者に通報したが、その一行が入力漏れになっていたのである。入力以前の様々な作業にこそ、専門家の存在意義があるといえよう。ところで出土量の増加といえ、中国や韓国も例外ではない。特に韓国の木簡は、まだ一二〇点余りとはいえ、新羅のほか、百済や伽耶のものも現れ、今後も発見例が増えてゆくことであろう。かねてから日本古代の木簡とのつながりが予想され、比較研究が望まれていたが、それを実現する素地が形成されつつある。平川南氏や李成市氏がその先鞭を付けられているのは周知の通りであろう。

昨年私は、遅まきながら始めて韓国を訪れ、関係当局の御好意で、百済の宮南池や陵山里の木簡を実見し、釜山では韓国最初の漢籍木簡である論語の木簡などに対面することができた。改めて日本の七世紀の木簡との類似を実感したことはいうまでもない。すでに韓国の研究者も関心を寄せているが、日韓の比較は重要な分野となることであろう。

しかし私は、類似点と同時に、一種の大きな違和感を味わったことも書いておかねばならない。それはかつて日本で展示された新羅木簡にも感じたものであったが、何故か韓国の木簡は総体に材や作りが荒々しい。しかしこの疑問は木簡の材質を聞いて氷解した。韓国簡のほとんど全てが松材という。おもえば松材が使われているかどうかは、飛鳥仏の産地比定にも判定基準とされている。檜はもちろん、杉などの良材に恵まれない韓国では、木簡もまた違った外貌を見せて当然であろう。保存処理を経た韓国簡が、多くの場合劣化したようにみえるのも、材質が災いしているのではなからうか。それはともかく、この材質の差が投げかける問題は小さくない。良材に恵まれない点は、中国も地域次第で同じであるが、ならば中国や韓国では、日本古代ほど紙木併用が盛んだったのであろうか。アジアでは、日本でのみ木彫仏が盛行したことも示唆深い。古代の日本が、割箸ならぬ木簡の消費大国であった可能性も追求してみなければなるまい。